

# 豊嶋郡の「織姫伝承」について

—クレハトリ・アヤハトリ（漢氏の伝承）—

（会員） 金谷 健一

はじめに

いつの頃からか、摂津国豊嶋郡と武庫郡にクレハトリ・アヤハトリ（呉の機織・漢の機織）伝承なるものが根付いている。

この織姫伝承（漢氏の伝承）を『日本書紀』から見ると、応神三十七年（三〇六）春二月条に阿知使主・都加使主が縫工女を求めて高麗国に渡り、呉に到り呉の国王から工女、兄媛・弟媛・呉織・穴（漢）織ら四名の織姫を賜り、応神四十一年（三一〇）春二月条に、津の国の武庫津（西宮）に着いたという記述がみられる（呉国に行くのに何故高麗国へ？）。

ここからは豊嶋郡の伝承になるが、呉織・穴（漢）織の二名は武庫川から猪名川を上り、唐船ケ淵（現・池田市新町）に上陸、人々に機織の技術を伝えて死後呉織は

呉服神社に、漢織は穴織神社に祀られたという。

ところが『日本書紀』、雄略十四年正月条に次のような記述が見られる。

「身狭村主青等（阿知使主の子孫、大和高市郡明日香村）呉国の使と共に呉の才技（織姫）の漢織・呉織、及び衣縫（縫姫）の兄媛・弟媛らと住吉津（住吉区）に着く。磯齒津路（住吉区から東住吉区にかけての路）を通り、呉坂（東住吉区喜連）と名付ける。三月に呉人たちは桧隈野（飛鳥）に着く。衣縫（縫姫）の兄媛は大三輪神社に奉り、弟媛は漢衣縫部とする。才技（織姫）の漢織・呉織は飛鳥衣縫部・伊勢衣縫（『和名抄』に伊勢国志郡に呉部郷がみえる）の祖である」。

これは身狭村主青と桧隈民使博徳の呉からの帰朝記事であるが、地名の「磯齒津路」

などは『万葉集』（九九九番）からも確認出来る、また「呉坂」は現在の平野区杭全町付近で、即ち、住吉津↓美章園↓平野↓斑鳩と通って明日香に入ったのである。

では何故、応神紀と雄略紀に同じような記述が見られるのだろうか。応神二十年秋九月条に、「二十年秋九月に、倭漢直の祖阿知使主、その子都加使主、並びに己が党類十七県を率いて来帰り」と見え、現在、池田市や西宮市に「クレハトリ・アヤハトリ」として継承されている織姫伝承はこの短い文章にかかっている。八世紀に入って倭漢氏が繁栄し、雄略紀の出来事が応神紀に投影されたのである。それは阿知使主が後漢の靈帝とか、前漢の後裔だとされ、倭漢氏の宗家だと名乗る坂上苺田麻呂の延暦四年（七八五）の上表文にも見られるように、坂上氏によって形づくられた伝承である。

雄略紀の来朝を応神紀に投影している事は、雄略二十三年、宋の順帝に上奏された天皇の文章が「宋書倭国伝」に残っている

事や、応神三年（二七二）条の百済の「阿花王」即位の記事が「三国遺事」では、三九二年とあつて二運（一一〇年）の違いが見られる事などからも応神紀の記事についても五世紀の初め頃と見るべきであろう。

### 漢氏の概説

朝鮮半島から渡来した最も古い中国系を称する渡来系氏族で、後漢光武帝の末裔を称す。高市郡を中心に文官として活躍し、坂上・文・池辺などの氏族に分かれ、東（倭）の漢氏とよばれて、八〜九世紀には坂上氏を中心に勢力を保った。

別系統に西（河内）の漢氏がみられ、西淋寺、葛井寺、野中寺などで知られる氏族である。

### 坂上氏の概説

東（倭）漢氏から分かれた枝族で、系図では前漢の劉邦を祖先とする。壬申の乱では武功をたてる。天平宝字八年（七六四）坂上茹田麻呂が弓削道鏡追放に功があり、

その子坂上田村麻呂は征夷大將軍となり、正三位大納言に昇る。その後武門の氏族としては衰えるが、平安時代末期になって、明法道（律令制の紀伝・明法・算道）家として名を上げる。

### 坂上氏の豊嶋郡進出

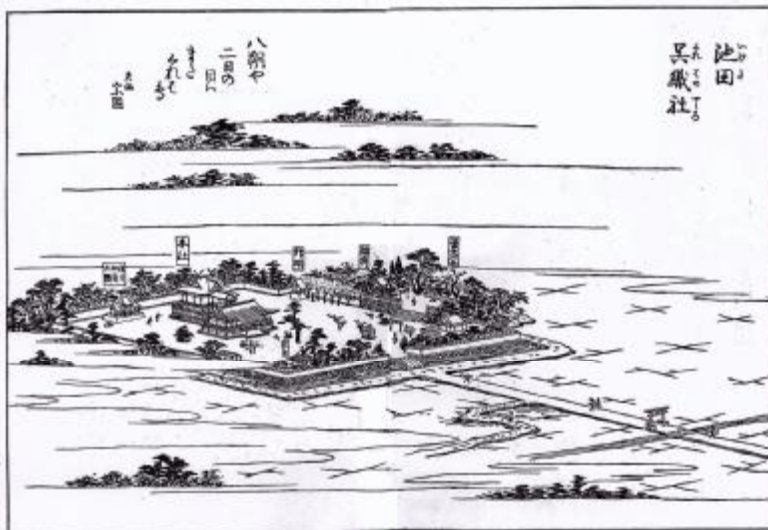
河内国土師の貫主、坂上維正の子、正任が平安時代中期に豊嶋郡に進出して、この地を「呉庭」と名付けて開発領主となった。何故クレハと読むのかは不明であるが、雄略十四年の『書紀』の文章から、呉坂を通じて明日香に着き、その地を「呉原」と呼んだとある事から、出自地に准えて「呉庭」と呼んだとも考えられる。

坂上一族は在地の秦一族と争う事もなく、秦氏の祀神、為那都比古神を祀り、既存の「秦ノ上社」に漢氏の系譜上の始祖である阿知使主を祀り「穴織神社」と呼ぶ。また「秦ノ下社」には都加使主を祀り「呉服神社」と呼んだ。

在地の秦一族との争いがみられなかった

### 摂津名所図会

#### 池田呉織社



事については、九世紀の終り頃になると秦氏にも衰微がみられて、本家筋も惟宗姓に改姓され十一世紀になると、檢非違使の下級官吏以外には惟宗姓は見られなくなる。

坂上氏の豊嶋郡進出と共に呉庭荘が開発されたといわれているが、坂上氏の事跡が見られず蓮華院（三十三間堂）文書に法華堂寄贈がみられるくらいである。

昭和三十五年発刊の『池田市史』では、大阪教育大学の舟ヶ崎正孝教授によつて、坂上氏による、呉庭莊園の開発を肯定されているが、平成九年発刊の『池田市史』では、同大学の吉田靖雄教授は呉庭莊園の実在を否定され、この時代の豊嶋郡は久我家（近衛・九条家に次ぐ七清華家）の領地だったといわれる。

因みに、寿永二年（一一八三）以前の豊嶋郡を見直すと、この頃の摂津国には、手島連・津島部・津島直・津島朝臣・椎田君・穂積臣・島首・久々知氏・勝部首らが入り乱れて、坂上一族による開発の事跡を把握出来ないのが実情である。

### 池田氏の豊嶋郡進出

池田氏についてもよく判らないが、元は藤原姓を名乗り寛弘年代に遡るとされるが、池田市の寺院に残されている、藤原景正の年代にも疑問がのこる。だが、多田の家臣には藤原姓を名乗る者が多く、池田氏と豊中の今西家（藤原家執務）の関係が親密であつた事はたしかである。紙面の都合で詳しくは書けないが、私は、室町時代初期に多田の家臣で野間城主の内藤伊賀守が美濃国池田郷から池田公貞（土岐一族）を呼びよせた事に始まるのではないかとみる。（池田氏の進出よりも、地名のほうが古いとする説もある）。

豊嶋郡に進出した池田氏は、すでに消滅していた川辺郡の式内社であつた「伊居太神社」を「秦ノ上社・穴織神社」に同祀して、自身の姓に重ね合わせて「伊居太神社」と呼んだと考えられる、神社名は現在三通りである。

池田市教育委員会発行の「池田学講座」

では、伊居太神社を式内社としているが、延喜式神名帳による豊嶋郡秦郷の式内社は「細川神社」であつて、神名帳に従つて「伊居太神社」は川辺郡の式内社とすべきである。池田の伊居太神社はイケダ神社と呼ぶべきである。なお尼崎に在る「伊居太神社」も式内社を名乗っているが、明治までは「春日神社」であつて格式を上げるため消滅した神社名に変更している。

よつて、「伊居太神社」の成立は池田氏の豊嶋郡進出以後である。因みに、大正十二年に伊居太神社から出されている「伊居太神社略縁起」（神主・河村鼎）には式内社との記入はみられない。

### 豊嶋郡における織姫伝承の疑問

- \* 応神紀・雄略紀の織工女渡来記事に豊嶋郡の地名がみられない。
- \* 豊嶋郡に於ける秦氏の確証は得られないが、漢氏に関する事跡、墓地が見られない。
- \* 織姫の墓と云われる姫室・梅室は平安

## 摂津名所図会

### 吳織穴織の錦織伝授



時代の経塚である。

\* 豊嶋郡の古墳から、紡錘車などの出土がなく、桑畑などの伝承もない、麻田の地名も古くには浅田とみられる。高槻市宮之川の神服神社（式内社）の近くには五十基以上の土饅頭の墓があつて（現在は消滅）、紡錘車が出土、近くには「桑原」の地名が残っている。

\* 穴織神社（秦ノ上社・伊居太神社）も、呉服神社（秦ノ下社）も延喜式内社ではなく、創起の時代は下がる。

\* 『穴織宮拾要記』には、古代には神社の前まで海であつたと書かれているが、弥生時代の田能遺跡（尼崎市）や、宮ノ前遺跡（池田市・伊丹市）からは人間の生活がみられる。

#### 蓋然性のある神社

\* 西宮市の松原神社（廣田神社南宮）にも織姫伝承が継承されていて、津門呉羽町、津門綾羽町の地名が存在する。

\* 『日本書記』の応神紀には、津門・武

庫の地名がみられ、津門の首が武庫の津を管理していた。

\* 『梁塵秘抄』（後白河法皇遺稿）によると、「廣田より、戸田へ渡る船もがな、浜のみたけへ事付もせむ」とあつて、武庫の津から廣田神社（式内社）までは船で往来していた事が判る。

\* 『住吉神社神代記』に、武庫川と、猪名川の女神が一人の男神を巡って争う話があり、その中に「両河一つに流れ合いて海に注ぐ」とあつて、武庫の津から武庫川を経て猪名川に入り豊嶋郡に行けると暗示しているが、この話は神戸市灘区にある西求女塚古墳と、東求女塚古墳の戦士が求塚墓（菟原処女墓）を巡る話で、『万葉集』や、謡曲の「求塚」に仮託された話であつて、両川の合流はあり得ない。

豊嶋郡に織姫伝承が広く膾炙された根拠  
\* 平安中期以後に坂上正任が豊嶋郡に進出し、自身の祖先伝承から応神紀の織

工女渡来記事に結びつけて、地名を「呉庭」と名付けて、呉庭荘と称した事によるとする説。

\* 室町時代になると武士社会から、庶民に至るまで「猿楽」（能楽・謡曲）が広がり、世阿弥作と云われる「呉服」が演能された事もその一面と考えられる。稿本の「海土乙女」「浦里」などの文から海の傍が舞台であると考えられる。

\* 元禄九年、池田の俳人で漢氏に繋がる家系を任じる坂上稲丸が「呉服絹」という俳書を出版し広く読まれたのも一因と考えられる。その他江戸時代の『撰陽群談』『撰津名所図絵』などに取り上げられて読まれた事にもよる。

おわりに

世阿弥の能楽「呉服」の概説は、帝に仕える臣下が住吉から西宮神社へ参詣の途中、松原で機を織る二人の乙女をみて、曰くを尋ねると二人は応神天皇の御代に唐から渡ってきて、御衣を織った呉織・漢織である

と答え、今日また目出度い御世であるので再びこの世に現れたと云う。翌朝磯に打ち寄せる波の音に添えて機音高く錦を織り、御世を祝って舞うと云う話である。

前述したように織姫伝承については『日本書紀』雄略十四年の機工女渡来記事には、地名、工女の派遣先などが具体的に記載されていて正しく時代考証がなされていると考えたい。

『書紀』には武庫・津門の地名がみられるの舞台が海辺であり、西宮市の松原神社の前には「漢織呉織伝承碑」が建ち、池田市と共に、クレハトリ・アヤハトリ伝承が語り継がれているが、いずれの話も史実として語るには合理性に欠ける、伝承は伝承として永く地域に語り継がれて行くべきであらう。



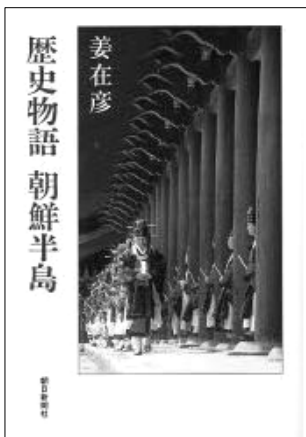
## 読書室

『歴史物語 朝鮮半島』（朝日新聞出版）

姜在彦

一三六五円（税込価格）

三つの建国神話から、古朝鮮の形成、新羅の国家統一、高麗王朝の中央集権的支配、モンゴル帝国の南進、豊臣秀吉の侵略、国柵封下で爛熟する両班支配、開国のウエスタン・インパクト、日韓併合と抵抗までを描く通史の決定版。半島の朝鮮と島国日本、アジアの二国の違いが見えてきます。



## 塚口先生と行く

### 若狭・丹後・但馬の古代史を探る旅(二)

(会員) 古高 邦子

\*第二日目 五月二十九日(金)

丹後国分寺跡く京都府立丹後郷土資料館く  
大風呂南一号墳丘墓く赤坂今井墳丘墓く丹  
後古代の里資料館く神明山古墳く網野銚子  
山古墳く籠神社

今日は四世紀の丹後の三大古墳といわれ  
る三つの古墳のうち、神明山古墳、網野銚  
子山古墳を訪ねます。後一つの蛭子山古墳  
は明日のお楽しみです。

バスの中では塚口義信先生から、丹後半  
島の首長と佐紀盾列の政治集団との深いか  
わりについて、講義していただきました。  
四世紀の丹波地方(令制下の丹波と丹後  
の両国域)は香坂王・忍熊王の体制派に属  
して繁栄していたが、五世紀に入ると没落  
し、丹後半島の顕著な古墳は数も減り、規

模が小さくなったというお話。

四世紀末の内乱のときに応神天皇を支援  
したのが、海部氏系図で有名な海部氏であ  
ること。垂仁天皇の太后の日葉酢媛命の妹  
の竹野媛命が不器量のため返され、途中で  
自害したという悲話も伺いました。

丹後の古墳を案内していただくのは京都  
府立丹後郷土資料館の奥村清一郎先生です。  
ユーモアを交え、古墳のことや発掘の苦労  
話を明るくお話していただきました。

#### 【丹後国分寺跡】

資料館の敷地の一部のようになっている  
国分寺跡は海が見える高台にあり、天橋立  
が正面に見えます。奈良時代の創建ですが、  
現在の遺跡は南北朝時代に再興されたもの  
で、塔跡礎石のみが残っており、その場所  
にはクローバーが白い花をつけていました。



国分寺の塔跡礎石の前で説  
明中の奥村先生と塚口先生。

## 【京都府立丹後郷土資料館】

まず丹後の三大古墳にも用いられたという丹後型円筒埴輪を見ました。円筒埴輪の上端部に無頸壺の上半分を重ねた形状の埴輪です。出土品を見た後、次に行く大風呂南一号墳丘墓のパネルの前で先生の説明を受けました。

## 【大風呂南一号墳丘墓】

大風呂南一号墳丘墓は曲がりくねった道を山へ登る中腹にあり、天橋立と阿蘇海を見渡せる眺望のよい高台に築かれています。弥生時代後期の王墓であるこの墓からはコバルトブルーに輝くガラス釧が出土しています。こんなにきれいな形で残っているのは珍しいとのこと。ほかにも豊富な副葬品が出土しています。これらの遺物からこの地方が早くから栄え、海上交通を利用して朝鮮半島や九州方面とも広く交易していたことが分かります。今では埋め戻され、近くには携帯電話の鉄塔がたっているのも時代を象徴しています。



弥生時代の王の墓&amp;現代のシンボル・携帯の鉄塔

墳丘の毀たれ常磐木落ち葉積む

宮田 佐智子

## 【赤坂今井墳丘墓】

福田川水系にあり、古代の交通の要所にあった、この墳丘墓は狭い谷あいであり、珍しく眺望がよくありません。弥生時代終末期の大型方形墳丘墓です。元の墳丘は東西三六メートル、南北三九メートル、高さ四メートル、幅五〜九メートルのテラスが四周に巡る構造です。埋葬施設からは東海地方の土器が出土し、日本で一番大きな舟形木棺が収まっています。水銀の朱が頭部に使われていました。また人骨は溶けてなくなっています。ガラス勾玉、管玉、耳飾りなどたくさん副葬品が出土しました。丹後地域の盟主的酋長の墓と考えられます。

## 【丹後古代の里資料館】

京丹後市内から発掘された考古資料を中心に展示されています。周囲には発掘成果を元にした弥生時代の集落が復元されており、資料館からは神明山古墳が望めます。

赤坂今井墳丘墓から出土した髪飾り、耳飾りが復元されていました。緑や青が鮮やかです。今でも十分使えそうなデザインで

す。横には実際の出土品が展示してあります。

### 【神明山古墳】

竹野神社を通って神明山古墳へ向かいます。この古墳は竹野川河口を見下ろす、丘陵上の日本海が望める景色のよいところにあります。四世紀後半に造られた日本海側で二番目の全長約一九〇メートルの前方後円墳です。葺石と埴輪列を持ち、前方部は場所によって三段築成が見られます。後円部はこんもりとなだらかに盛り土されていて、明治時代には一度桑畑にされようとしたとか。竹野郡は当時の丹波の中心と考えられ、丹後一帯を支配した豪族の墓と考えられます。当時この一帯は入り江で、すぐ側に港があったとのこと。朝鮮半島へ行くルートとして、また鉄資源などの海上交易で政治権力を得ていたようです。

### 【網野銚子山古墳】

日本海に注ぐ福田川の下流の丘陵にあります。近くには国道一七八号が通り、背後には本覚寺のこんもりと茂った森があります。



2009. 5. 29 網野銚子山古墳にて

す。実際に先生が発掘に携わられた古墳なので「奥村節」全開です。「全長は一九八メートルといわれていたが、二〇〇八年に測量して、二〇八メートルであることがわかった。奈良県の大和古墳群の古墳と似ていることから、西殿塚古墳を参考にして再現した。四世紀代、ヤマトと同盟を結んで丹波地方が一番勢いのあるときに、丹波一帯から人を集めて、作られた古墳。竹野媛の父由基理の墓ではないか？」というのが先生の意見です。地元では、竹野媛は故郷に戻って幸せに暮らしたと伝えられているそうです。

塚口先生からは、この古墳は日本海沿岸交易の拠点的作用を担った丹波の大首長の墓で、佐紀陵山古墳、五色塚古墳と同型と考えられるとお聴きしました。

### 【籠神社】

丹後の一の宮で、丹後第一の大社。籠神社の歴史は「神代」にまでさかのぼり、伊勢神宮はここから伊勢へ移されたという伝承があり、元伊勢とも呼ばれています。平



安時代初期に書写された海部氏系図は海部宮司家の推移や、古代の大豪族の変遷を示した貴重な資料で、国宝に指定されています。

以前訪ねたときにはお神酒をよばれ、系図の写しを見せていただきました。お参りをすませ、有志で奥宮の真名井神社へ行きました。少し山に入っていくと、杜の中に鳥居が見えます。その横に湧き出た水は神水とか。ひとくち口に含みました。冷たくて実においしい水です。ペットボトルで持ち帰った人もいます。森厳な雰囲気は漂い、境内にはご神体の磐座がありました。

帰りのバスではきれいな虹が天と天橋立を結ぶようにかかっているのを見えました。ホテルに戻り夕食、今日は私と一日違いの林駿郎さんのお誕生日、みんなで乾杯！二人で「みんなに祝ってもらえるから、来年の旅行もこの日だといいいね」と話しました。



秋湯き吉備路に実る百果かな

宮田 佐智子



さし絵・カット募集中です！

十二月十二日（土） 午後二時より  
会場 豊中市教育センター

「コノハナノサクヤビメの神話」  
堺女子短期大学名誉学長

塚口 義信 先生

\*十二月の現地見学はお休みです。

#### 編集後記

久しぶりに強い台風が日本列島を縦断いたしました。上陸後も殆ど勢力を落とすことなく、予想されていた大雨よりも、突風や豊中の幼稚園の屋根が吹き飛んだ被害が全国ニュースで流れたように、強風の被害のほうが目立った印象です。筆者の周辺でも、トタンやビニールの波板屋根の破損が多く見られました。

地球が温暖化すれば台風も巨大化する恐れがありとか、二酸化炭素二十五パーセント削減提案の実施を待つまでもなく、地球温暖化阻止のために今からでも個人の日常生活で、できることから、積み重ねていく心がけが必要ではないでしょうか。



<http://homepage2.nifty.com/toyonakareki/shi/>